
豪雨戦隊・ヤメルンチャー

風森 明日香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

豪雨戦隊・ヤメルンチャー

【コード】

N83910

【作者名】

風森 明日香

【あらすじ】

豪雨の時にしか変身できない戦隊ヒーロー・ヤメルンチャー。
ベルト製作過程から、どうぞお楽しみください。

その1 失敗は……成功の……？

(注)

この作品は、現在某テレビ局で放送中の戦隊ヒーローものとは、全く関係ありません。

「よし……うまくいったぞ。」

白衣の男が、テーブルの上の置かれた、意味不明のガラクタ類を見ながら、意味ありげに微笑む。

……ってか……ここ4畳半しかないじゃんか……せまつ！
つと、簡単な状況説明をしておきまして。

その狭い部屋にいる、この男。

見た目からして臭そう。

実際、小バエが頭の上を……。

想像しただけで、気持ち悪くなってきたので省略。

さて、彼は、一体何をしているのでしょう？

どうやら、何かが完成したのは分かるが……それが何なのか？
作者とこの男以外、誰も知るまい。

などと、ギャグ小説らしく解説（なのか？）したところで……
おっと！

この汚らしい男、手に何か持って、飛び出しました。

外は、当たるとかなり痛いくらいのどしゃぶり。

当然、男は全身濡れネズミ。

傘も役に立たないくらいなの、このどしゃぶりでは、それも仕方のない結果。

しかし、男は、わけの分からないものを腰に巻く。

さらに、どしゃぶりで喋りにくいにも関わらず、こう叫んだ。

「へ〜んし〜ん!」

腰に巻いた……まあ……ここは……。

『ベルト』

と申しますか。

そのベルトは、どしゃぶりのエネルギーを受け、内部システムのタービンが……。

1秒間に約135012回の高速回転!

……をやるわけもなく。

ボン!

小さく爆発してしまったのだった。

ススで真っ黒。

頭アフロになっても、ばっちり決めた変身ポーズで立っている男。傷一つついていない、筋肉隆々の丈夫な体に、変身の必要性はなさそうである。

が、男は、どしゃぶりでの体の汚れを落とし、部屋へと戻っていったのだった。

「何がいけなかったのだ。回転数か？」

腕組みをしながら、男が呟く。

その顔は、雨で洗ったとは言え、まだススで真っ黒である。

そういえば、この人の名前言ってなかったよね〜。

この人の名前は、白衣博士。

えっ?

そのまんまやないか?

しかも、白衣よこれてる?

分かってないな〜。

ルビ振るから、ちゃんと読んでね。

彼の名前は白衣博士^{しやくひはくし}。

その白衣さん……何やら、計算を始めました。

とりあえず、1行空けるので、次の文章に変わるまで、計算して

てもらいましょう。

1週間後・・・って、1行空けるだけで、1週間経ってるなんて小説って便利。

『ベルト』

の計算が無事終わり、白衣は、製作に取りかかっていた。

「うむ。回転数を27回減らした。これで、爆発する事はないはずだ。」

タービンをいじり、ベルトの外観を綺麗にし、磨きをかける。

先日のベルトは、あくまでも実験用だったため、汚らしかった。

だが、今回は計算に計算を重ねた完成品だ。

必ずうまくいく。間違いない。

白衣は、自信をもっていた。

あとは、試運転だけだ。

変身できれば、超高性能ヤメルンチャースーツが装着される。

なぜ、ヤメルンチャーなのだろうか？

何度辞めようか分からない実験だったという事実、戦隊物の「ジャー」をつけたかったのだ。

だが、ただつけるのは、パクリみたいでいやだ。

そこで、チャーにして、くっつけてヤメルンチャー。

う〜ん。いい名前だ。感涙にひたる白衣。

よし！さっそく変身だ！

変身できるのだから、服はいらない。

変身タイムは・・・。

『へ〜んしん！』

と叫んだ約2秒後。

あわせても10秒かかるまい。

その間、裸でいることに、何の恥じらいがあるつか。

カッコいいヒーローになれるのだから。

汚い白衣・・・こちらの読みは『はくい』ね。

ルビふってるから大丈夫よね。

・・・を脱ぎ捨て、ベルトを腰に巻き、白衣は勢はくぎぬいよく外に飛び出す。

次の瞬間叫んだ。

「へ〜んしん！」

2秒・・・10秒・・・1分・・・5分。

本日は、カンカンの日本晴れでございませう！

「きゃ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！」

腰に変なベルトを着けた、男の素っ裸。

まともに目撃した婦女子により、白衣は警察に連行されたのだった。

白衣が、警察から釈放されたのは、3日後の事だった。

結局、春先のよくある事として、片づけられたようだ。

それよりも、白衣には嬉しい事が。

そう・・・今度こそ、雨を待ちさえすれば、変身実験出来るのだ。どしゃぶりよ来い！

毎日、テレビにかじりつき、天気予報チェック。

願掛けに、神社の階段を上り下り。

電話の予報を聞こう・・・誰もでんわ・・・。

などと、雨どころか、雪まで降ってきそうだが、白衣は祈りを捧げていた。

彼の祈りが、天に通じたのだろうか？

ついに、どしゃぶりの日がやってきた！

よ〜し！

白衣は、通報されない程度の服を着、どしゃぶりの中に飛び出す。全身に、突き刺さるようなどしゃぶり。

これだ！これを待っていたんだ！

よ〜し！

白衣は、真剣な表情で、こう叫んだ。

「へ〜んし〜ん！」

腰に巻いたベルトが（中略）爆発する事もなく、白衣の全身が、まばゆい光に包まれる。

次々と装着されていく、ヤメルンチャースーツ。
時間にして2秒弱。

「やった〜！ついにやったぞ！」

えっ？どんな格好のスーツかって？

ほれ・・・こんな感じのスーツよん。

見えない？

そりゃそうでしょ・・・小説なんだから。

かっこいいヒーロースーツを想像してみてね。

えっ？色とか・・・形とか・・・文章表現で出来るだろ？

あははは。そ、そうね・・・。

その2 仲間を求めて・・・(前書き)

まだこの章は、執筆中でやんす。

その2 仲間を求めて・・・

実験は無事成功。

白衣は、成功を喜ぶ間もなく、次の作業にかかっていた。

そう・・・タイトルを見ていただいで分かるとおり、この作品は、豪雨戦隊なのだ。

そうよ。戦隊よん。

イコール・・・一人では、戦隊ではあり得ない。

それ以前に白衣は、名前から分かる通り、白衣博士である。

白衣は、戦うヒーローより、時々ヒーロー達に・・・。

「この武器・・・試作品なんだけど、うまくいく確率は3%弱だ。」
なんて言いながら・・・。

「博士！俺達は、博士を信じます！」

って事で、3%どころか、超強力な武器になり・・・。

でも、最終回近くには、それすらも効かない敵が出てくるという・・・長いよ！ゴホン。

とにかく、そんな武器や秘密のなんやらを作る博士でいたいのだ。そうなると、あと4人分のベルトと、5人のヒーローを探さねばならない。

5人中2人は、スケベな男性読者のために、ミニスカートのねーちゃん。

ってか、18禁にしなくて大丈夫？

まあ、メンバー集まらなくて、最悪の時には作者が・・・読者が減る？

えっ？ 最近は、戦隊物好きな女性も多い？

私だけじゃないのね・・・あはは・・・嬉しい。

じゃあ、筋肉ムチムチのマツチヨなあんちゃんにするか？

その辺は、1行空けて考えましょう。

ってか・・・注意事項で、ポーズなんちゃらにしなくて大丈夫？

実験ベルトの回転数を元に、白衣は5つのベルトを完成させた。そうになると、次はメンバーの5人を集めるだけだが……。正直、白衣には、友達らしい友達もおらず、しかも。

『世界を守るため！』

なんて言っていたら、きつと精神病院にいれられるだろう。

……ってか、警察に捕まった時も、あやうく送られそうになったのだ。

やばいっしょ。コホン。

その辺はさておき、メンバーを集めない事には、どうにもならない。

仕方なく、白衣は英語二文字の求人雑誌。

(もしや福岡のみか？他地方のかた、分からなかったらごめんなさい。)

……に募集広告を出そうとしたのだ。

しかし、募集広告には、万単位でお金が必要。

お金のためには、仕事が必要。

白衣は、まず自分の仕事を探すべく、無料の求人誌を読みあさるのだった。

なんとか、白衣のアルバイトが決まり、1カ月が過ぎた。

力仕事をしているせい、白衣はムキムキのマツチヨになっていった。

まあ……白衣の場合、元々マツチヨなんですけどね。

そんなマツチヨな白衣に、仲良くしてくれる同僚がいた。

同じくマツチヨなこの男。

名前は豪力（じゆうりき）剛（ごう）。

まさに、名前の通り、強そうな男である。

これは、是非ともヤメルンチャーに！

そんな思いを胸に秘め、白衣は毎日ドキドキしていたのだった。

ある日のこと……。

「おい！白衣！飲みに行かないか？」

白衣は飲みを誘われた。

「あ、ああ……。」

豪力の顔を、まともに見れない白衣。

しかも、ドキドキ感が止まらない。

正直、逃げ出したいが、この機会を逃せば、次はいつになるのだろうか？

なんとしても、告白するんだ！

あの……念のために言っておきますが、この小説は、恋愛ものじゃないですよ。

「な、なあ……豪力。」

ある程度酒が進んだ頃、白衣が赤い顔で切り出した。

「お前……ヤメルンチャーにならないか？」
数十秒の間。

ジョッキを傾けた状態で、豪力は止まっていた。

時は動き出す。

「白衣！仕事辞めるのか？つらいのか？俺でよければ、相談にのるぞ。」

相変わらず、豪力はいい奴だ。

お酒も強く、白衣を心配しつつ、介抱してくれている。

……ってか、基本的にヒッキーの白衣は、普段飲まないため、

お酒がめっばう弱いのだ。

筋肉は、豪力に勝るとも劣らないくらい、マッチョなんですけどね。なんて、あんまり関係ないので、話を進めます。

と言っても、豪力が、白衣の言葉を聞き違えたと言えないですよね。

はい……続けます。

「違うよ」。俺が考えた、豪雨戦隊・ヤメルンチャー。その隊員に

ならないかって言ってるんだ。」

豪力は、ハハハと笑っている。

「なんだよ。ヒーローものの話か？俺も子供の頃、憧れたよ。」
作者も昔、ピンクの〰〰ジャーに憧れていました・・・関係ないか・・・話を進めます。

「いや・・・子供じゃない。今の事だ見てろ！」

おあつらえむきに、外はどしゃぶり。

白衣は、何故か持ち歩いているヤメルンチャーベルトを腰に巻き、外に飛び出し叫ぶ！

「へ〜んし〜ん！」

ベルト内のタービンが、どしゃぶりの・・・あつ・・・知ってるよね。

省略省略。

んで、白衣は見事変身完了。

白衣を追って、飛び出した豪力も、ヤメルンチャースーツを見て呆然。

体が、びしょびしょになるのも気にならなかった。

「白衣・・・お前・・・。」

「・・・豪力。これが、ヤメルンチャースーツだ。友人として、お前に受け取ってほしい。」

「あ、ああ。なんだかよく分らんが、お前との友情の証と言うなら、喜んで受け取るう。」

がっしりと握手する二人。

だが、不審な二人に、食い逃げされたと勘違いした飲み屋のオヤジにより、警察に通報。

逮捕され、連行されたのだった。

ようやく、警察から釈放された豪力と白衣。

だが、なんだか気持ちが悪ムシヤクシヤしていた。

ただの誤解なのに、結局、食い逃げのレッテルを貼られてしまっ

ただ。

「仕方ない！今夜は、とことん飲むか！白衣ついてこい！俺のおくりだ！」

クイツクイツと、豪力が手招きする。

どうやら、いきつけの店があるようだ。

向かう足取りは、かなり軽い。

「あ．．．ああ。」

元はと言えば、ヤメルンチャースーツを受け取ってくれたために、豪力まで警察に捕まってしまった。

それなのに、この豪快さ。

白衣の目から、熱い涙がこぼれる。

「バカやろう！何泣いてやがるんだ！」

そつと、白衣を抱き寄せる豪力。

「だつて．．．だつて．．．嬉しくて．．．。」

素直な言葉が、白衣の口について出る。

抱かれた腕から、豪力の温もりがじわっと広がり、白衣は身をまかせていた。

しばらく忘れていた、この温もり。

自分は、戦士として戦えないが、せめて戦いに有利になるような発明をしなきゃ。

新たな決意が、白衣の胸に、フツフツと湧きあがっていた。

「この人を．．．必ず守るんだ。」

．．．すみません．．．この小説、ボーイズラブじゃないんですけど．．．。

豪力と白衣は、飲みまくっていた。

飲んでいる場所は、何故かホストクラブ。

しかも、豪力の行きつけらしく、入った瞬間、キープボトルが出てくる素早さ。

もしかして．．．豪力って．．．18禁のあっち系？

危ない疑惑が、白衣の脳裏に浮かんだ。

と、その時、店の奥から、スーツをびしつと決めたホストがやってきた。

オーラが、他のホストと全く違う。

「よお！マスター！元気か？」

「ふふふ。豪力。今日は同伴か？」

顔なじみなのだろうか？

まあ、顔なじみでなければ、男がホストクラブになんてくるまいが……。

「こいつは、高校のときのダチなんだ。」

変な勘違いをしないように、豪力が白衣に耳打ちする。

あの……声でかいから、まる聞こえなんですが……。

「ふふふ。まあな。お前は、命の恩人だからな。」

キザッたらしい口調なのだが、外見の爽やかさに救われている。

「命の恩人？」

何があつたのだろうか？

白衣は気になったが、豪力は、既にボトルごとウイスキーを飲んでいる。

……でご相伴にあずかり……なのです。

えっ？

ひとまず、二人で飲んでるだけですからね……。

わざわざ文章表現しなくてもいいと思いますよ〜。

かなり酒がまわり、豪力と白衣は、ふらふらと千鳥足で歩いて
いた。

どちらも酔っぱらっているため、送迎に新人ホストくんをつけて
くれたのは、店長の心遣いである。

「昔から、あいつはいいいやつだよ。お前も、しっかり頑張れよ〜。」

赤い顔で、豪力が城分しろわけ 光太こうたの肩を叩く。

「痛いっすよ〜！剛さん加減知らないんだから……。」

叩かれた肩をさすりながらも、光太は嬉しそうだ。

『豪力さん』ではなく『剛さん』と呼んでいるくらいだ。それなりに、慕っているのだろう。

なんとなく、2人の会話に入れない孤独感。

白衣は、とぼとぼと歩いていった。

・・・と、その時。

黒いマントの男が、3人に襲いかかってきた。

しかも、黒いマスクをかぶっており、街灯がなければ、完全な闇討ちだ。

「くっつ！誰だよ！」

慌ててベルトを取り出し、変身しようとするが、雨が降っていないため、当然変身出来ない。

「白衣！どうして変身出来ないんだよ！」

そうなのだ。

豪力の目の前で変身した時は、かなりの土砂降りだったため、説明するのを忘れていたのだ。

「ふははははは。覚えておけ！わが名はマスター仮面！闇の軍団・ウォータービジネスのドンだ！」

笑い声を残し、黒マントの男は去って行った。

何も出来ず、豪力・城分・白衣の3人は、ただ呆然と立ち尽くしていた。

数分後、豪力が口を開く。

「なあ白衣。どうして、変身出来なかったんだ？」

ああ・・・隠していた事実。

それを知ってしまえば、あなたは私に罵声を浴びせて、私の前から消えてしまいかもしれない。

でも・・・伝えなきゃ、あなたの命にかかわるものね・・・。

いろいろな想い（？）を封じ込めながら、白衣が口を開く。

「・・・実は・・・ヤメルンチャーは・・・土砂降りの中でしか変

身できないんだ。」

言ってしまった。

お別れね。

忘れないあなたの事……。

白衣の両目から、ぽろぽろと涙がこぼれる。

一刻も早く、ここから消えてしまいたかった。

だが、豪力からの返事は、意外なものだった。

「なぐんだ。そんな事か。てっきり故障してしまったのかと思っただぜ。」

ベルトを大事そうにさすり、豪力は豪快に笑った。

「白衣。お前にもらった、大切なベルトだからな。壊れてたらどうしようかと思っただよ。」

豪力の言葉を聞いて、白衣の目から、今度は違う涙が流れる。

「豪力……ありがとう。」

なぜか、がちりと抱きつく白衣。

だが、熱い二人とは対照的に、城分は、なぜか冷めた目で見つめていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8391o/>

豪雨戦隊・ヤメルンチャー

2010年12月5日23時40分発行